

目次

【2013年 聖書講筵レジュメ（配付資料等）】

2013年

2013年4月 サムエル記下 資料

（主として、『口語 旧約聖書略解』による）

2013年4月14日（東京新宿）

2013年6月 「キリスト召団の使命と課題」（福音特別セミナー）

2013年6月1～2日（御殿場YMC A東山荘）

2013年7月 夏季福音特別集会（京都）のご案内

2013年7月14日（京都）

2013年8月 夏季福音特別集会 ヘブル書

2013年8月23～24日（京都）



資料

2013年4月 サムエル記下

（主として、『口語 旧約聖書略解』による）

2013年4月14日（東京新宿）

【その1 登場人物の解説】

ヘブロンで生まれたダビデの男の子（3・2～5）

アムノン 母はエズレルの女アヒアノム

キレアブ 母は、ナバルの妻であったアビガイル

アブサロム 母はゲシユル王タルマイの娘マアカ

アドニヤ 母はハギテ ソロモンと王位を争う（列王上1・5）

シバテヤ 母はアビタル

イテレム 母はエグラ

ダビデはヘブロンで7年6か月王位にあり、後、エルサレムで33年間王位にあった。

エルサレムでダビデに生まれた子らは、バテシバとの間に、シメア、シヨバブ、ナタン、ソロモンの4人、他に9人、更にそばめの生んだ子らもいた（歴代上3・5～9）。

ゼルヤ ダビデの異母姉 その子が、ヨアブ、アビシャイ、アサヘル（俊足

ランナー）。ヨアブはダビデの軍の長。アンモンとの戦いの前線で指揮を執る。部下のウリヤが最前線で戦死（11章）。アムノンを打ったアブサロムを呼び戻すことをダビデに促す（14章）。

アブネル ネルの子。サウルの軍の長。イシボセテを擁立し、イスラエルの王とする。アサヘル（ヨアブの弟）を殺したので、ヨアブが復讐する（3・26～30）。

イシボセテ サウルの子。略奪隊長レカブとバンナに殺される。この二人をダビデは殺す。

メピボセテ サウルの子ヨナタンの子で地に転落した際、足を痛め、足なえとなる。後、ダビデの厚遇を受ける（9章）。

ミカル サウルの娘。ダビデの妻となるも、気ぐらい高く、「神の箱」の前で踊り狂態を露呈したダビデを蔑む（6・12～23）。

ナタン 神の預言者 ①神殿建築に関し、神の言を受けてダビデに伝える（7章）。②ウリヤの妻のことでダビデを譴責する（12章）。

ヂバ サウルの僕でヨナタンの子メピボセテに仕える（9章）。

バテシバ エリアムの娘。ヘテびとウリヤの妻。ウリヤの死後、ダビデの妻



となる。

アブサロム ダビデの第3子、後、ダビデと対立(14章以下の主役)。兄アムノンが異母妹タマルを辱めたので、タマルは兄のアブサロムの家で寂しく過ごす(13章)。アブサロムはアムノンを憎み、若者に命じてアムノンを殺害し、タルマイ(母方の祖父でゲシュルの王)の下に逃れる(13章)。

アヒトペル バテシバの祖父。ダビデの議官として、その忠信は重んじられていた(15・12、16・23、歴代上27・33)。後、アブサロムの反逆に加わったが、その進言が取り上げられず、失敗を予見して自殺した(17・1～23)。

ホシャイ ダビデの友(15・37)。

サムエル記下 資料【その2】

5章以下の概要

《I》 5・1～8・18 ダビデ、全イスラエルの王となる。

ダビデはエルサレムを攻略し、ここを都とした(5章)。ペリシテ人との戦いに勝利し、次に彼は首都を宗教的礼拝の中心とする目的で、神の箱をキリアテ・ヤリムからダビデの町に移そうとしたが、ウザが神の怒りに触れた行為をしたので、オベデ・エドムの家に留めることになった。3か月後、無事にエルサレムに運ぶことができた。ダビデは歓喜し、宗教的熱情が激発し、狂態を演じたので、妻ミカルはダビデを罵った(6章)。

ダビデは主のために神殿を建立しようと計画したが禁じられた(7章)。8章は、ダビデの関係した種々の戦争の略記。歴代上18章と重複。

《II》 9・1～20・26 ダビデ王の宮廷史

この部分にはダビデがエルサレムで王位を確立した時から彼の生涯の終わりに近い頃までのことが記されている。

ダビデとメピボセテ	9・1～13
アンモン戦争とバテシバ事件	10・1～19
ダビデとバテシバ	11・2～27
ナタンの譴責	12・1～25
アムノンとアブサロム	13・1～14・33
アムノンとタマル	13・1～22
アブサロムの復讐	13・23～29
アブサロムの逃走	13・30～39
アブサロムの復讐	14・1～33
アブサロムの謀反	15・1～19・43



アブサロム、民心をつかむ	15・1～6
アブサロムの陰謀	15・7～12
ダビデ、エルサレムから逃げる	15・13～18
イッタイの誠実	15・19～23
神の箱をエルサレムに返す	15・24～29
ホシャイにアヒトペルの計略を変更させる	15・10～37
ヂバ、ダビデに贈物をおく	16・1～4
シメイ、ダビデをのろう	16・5～14
アブサロム、エルサレムを占領し、	
ホシャイ、アブサロムに仕える	16・5～19
アヒトペルの計りごと	16・20～23
アヒトペルとホシャイ	17・1～14
ホシャイ、ダビデに通報する	17・15～23
ダビデ、マハナイムに至る	17・24～29
エフライムの森の中の戦い	18・1～8
アブサロムの死	18・9～18
ヨアブ、ダビデを諫め、覚ます	19・1～8a
ダビデ、エルサレムに戻る	19・8b～43
シバの反乱	20・1～26
シバ、反旗をひるがえす	20・1～3
ヨアブ、アマサを暗殺する	20・4～13
シバの死	20・14～22
ダビデ王宮の官吏	20・23～26

《Ⅲ》 21・1～24・25 追加

この4章は、後に加えられたもので、9～20章の物語は列王記上1～2章に続いて、そこで終るのである。編者は、ダビデ王の治世に関し、ほぼ記し終わったが、更に加えるべき材料を発見して、これを一括してここに追加したものと考えられる。

3年の飢饉	21・1～14
ダビデのペリシテ人に対する戦績	21・15～22
感謝の歌	22・1～51 詩篇18篇と同じ
苦難の中から神に呼ばれる	22・1～7
神の顕現	22・8～16
救いは義しき者に与えられる	22・17～31



神が力と成功の源であることを讃える	22・47 〜 51	22・32 〜 46
讃美と感謝		
ダビデの最後の言葉	23・1 〜 7	
ダビデの勇士の人名録	23・8 〜 39	
ダビデの3勇士	23・8 〜 12	
ベツレヘムの井戸の水	23・13 〜 17	
アビシャイとベナヤの功績	23・18 〜 23	
30人の人名録	23・24 〜 39	
人口調査と疫病	24・1 〜 25	
人口調査	24・1 〜 9	
人口調査に対する罰	24・10 〜 17	
ダビデ、アラウナの打ち場に祭壇を建てる		24・18 〜 25



福音特別セミナー

2013年6月「キリスト召団の使命と課題」

2013年6月1～2日（御殿場YMCA東山荘）

主題の趣旨

小池辰雄先生が、先生の信仰に連なる全国各地の信仰の群れに対して「キリスト召団」という名称を賦与し、共通の目標と相互の連携・協力のもとに福音の伝道活動を積極的に展開しようとされたのは1980年であった。先生の集会は最初、「武蔵野幕屋」と称していたが、手島郁郎氏が自己の群れを「幕屋」と称して大々的な宣教活動を展開するに及んで、幕屋に代えて「召団」なる名称を用い、「東京キリスト召団」とされた。京都では1972年に奥田が独立の集会を始めたが、1973年の夏季福音特別集會（伊豆松崎）において、集會名を「京都キリスト召団」と称するについて先生の了承を得て今日に至っている。次いで、1976年末には「大阪キリスト召団」が誕生し、その後、埼玉、裾野、奈良の各キリスト召団が続ぎ、1980年には6召団が存在した。先生はこれらの召団を統合するものとして「日本キリスト召団」なる名称を用い、自らはその「団長」となった。ただし、各召団はそれぞれ独立の存在であり、「日本キリスト召団」の支部もしくは支配下団体ではないことが了承されていた。先生は、この「日本キリスト召団」の共通の機関誌として、『キリストの福音誌 エン・クリスト』（主筆 小池辰雄）を発行することとされた。

以上が、「キリスト召団」の創設から先生の召天に至るまでの概略であるが、我々は、「召団」ないし「キリスト召団」について、どのような自覚を持っているのだろうか。具体的には、次の各点についてどのように認識しているのだろうか。この点が明確でないと、我々は自らの存在理由、目標、使命、課題等について、他人から尋ねられても的確な応答がでないし、積極的な福音伝道活動を実践する上でも方向が定まらないように思う。

1、「召団」ないし「キリスト召団」は、プロテスタント系の「教会」、「無教会」とは異なる団体であるとすれば、どの点で異なるのか。組織や形態、信仰箇条が「教会」、「無教会」のいずれとも異なる「第三の形態、信仰箇条」を唱道する点に独自性があるのか。小池先生はどう考えておられたのか。あなた自身は、どう考えているか。

2、小池先生は、『無者キリスト』『無の神学』『エン・クリスト』『キリスト告白録』において、「新宗教改革」を唱道しておられる。その中身は何か。「新宗教改革」と「召団」ないし「キリスト召団」とはどのような関係にあるのか。別言すれば、「新宗教改革」はカトリック教会であろうと、プロテスタント系の諸教団・諸教会だ



ろうと、いずれの信仰団体においても共通の課題として自覚的に受容すべき内容・目標として提唱されているのであって、「召団」ないし「キリスト召団」だけのものではない（もちろん、「召団」・「キリスト召団」の中心課題・シンボルではあるが）ということなのか。

3、小池福音の核心は極めて単純・明瞭である。キリストの十字架（贖罪）により「無」（旧き我の死、自我からの解放）を賜り、その「無」の場に「聖霊」（キリストの永遠の生命）を賜る。これは、全て神・キリストの賜う絶対恩寵であって、我々の方は十字架のキリストの中へ投身する事あるのみ。祈りとは、十字架のキリストへの投身という激しい内的行為である。そこに聖霊が臨み賜う。これが「エン・クリスト」

「我、主と共に十字架せられたり、もはや我生くるに非ず、みたまのキリスト
わがうちに生き給うなり」

の根源的現実の事態であり、相対的な自己を問題とすることは不要。この「十字架（旧き我の死）・聖霊（キリストの永遠の生命）」一如の根源現実の中に日々生きる事、

「わが言は霊なり、生命なり」

のキリストの言（その証言である新約聖書およびイザヤ、エレミヤなどの預言書）を日々身読すること、「愛する」とは人を救い上げる事。聖霊を体受しておれば、逆境になればなるほど、逆に力が湧く。絶対にへこたれない。人生の目標は神・キリスト讃美の生涯を貫くことである。

以上は私（奥田）の小池福音の理解である。そして先生自身は、そのような生き方を貫かれた。

上記の小池福音の理解を前提としたとき、次のような諸点（問題）に対しては、どういう方向ないし心構えで対処すればよいのだろうか。

先生の霊的次元に到達していない者たちは、ひたすら、先生と同次元に到達する事をめざして努力するほかはなく、それ以外の事は、すべて後回し、ということになるのか。

我々は、この世（現世）において、さまざまな問題に直面している。個人的なことだけを取り上げても、家族の中で自分一人だけがキリスト信者になったという場合、他の家族員に対してどう接すればよいのか。同様なことは、職場についても言える。

また、職業（仕事）と信仰生活（召団の集会への出席、伝道活動への協力など）の両立が困難なことが少なくない。携わる仕事の内容・責任が重くなればなるほど、それに集中・熱中することと、上記のような霊的に高次元の福音の体得（聖書の身読、投身の祈り、集会への参加）との両立が難しくなる（召団には専属の牧師はいない。代表者も普通にこの世の職業に従事する普通人・職業人である）。現世での様々の問題は、「聖霊をいただいておれば」「聖霊の力と智



慧で」自ずと解決されるよ、ということですむのか。要は、高度の靈的・宗教的次元と現実生活のギャップにどう対処すればよいのか。すべてを、各人の「信仰」「祈り」に委ねて、各自それぞれに解決しなさい、ということですか。

私自身も、しばしば、困難の中に在る兄弟姉妹に対して、

「汝ら世にありては患難^{なやみ}あり、されど雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

のキリストの御言葉をもつて励ましてきた。聖日集会や特別集会での「感話」「証言」において、各人の現実生活の中で、直面した問題・課題や困難を主がどのように導き、道を開いて下さったか、つまり、日常生活（家族の中で、職場において、自分の負わされている仕事や責務の遂行において）の中での「生きた信仰」、主の賜った導き、解決、困難の克服、といった具体的な証言が乏しいことは残念である。

次世代への伝達、継承の視点の欠如

先生が唱道され、貫き、証しされた「召団の信仰」は、「十字架・聖霊一如」の靈的・天国的事態を「永遠の現在」として「永遠の生命」（キリストの霊生）の中で日々を生きる事、この「永遠の生命」を他人に分ち与える事（それが伝道であり、「人を愛する」とは、「人を救い上げる事」）に徹することが全てであつて、先生が天に召された後、各キリスト召団がどうなるか、とりわけ「東京キリスト召団」がどう継承されていくのかについては、私の知る限り、表面的には、何も言われなかった。

また、日本人にとつては、きわめて重要な、「冠婚葬祭」の問題についても何の指針も示されなかった。日本人の家庭、家族は、「冠婚葬祭」問題、とりわけ、葬儀・埋葬・墓地・供養の問題については、特定の宗派の寺とか神社への帰属意識が（平常時には無関心であつても、いざという時には）きわめて強い。カトリック教徒の方々は、おそらくこの点での安心感に支えられているのではなからうか。小池先生は、この点に関しては「無頓着」と言っている。いいほど、各人の判断と対処に委ねられた。したがって、東京キリスト召団はもとより、他召団においても、それぞれが召団の固有の墓地を持つとかいうことは、全く関心の外だつたように見受けられる。けれども、日本人にとつては、ごく普通には、信仰、宗教、ということと、冠婚葬祭の問題、とりわけ先祖の墓と自分のかかわり、クリスチャンになれば先祖の墓（多くは特定宗派の寺の墓）とは別の独自の墓（共同でよい）に埋葬されることを望むのではなからうか。

極言すれば、先生にとつては「現在」「永遠の今」がすべてであり、自分の亡きあとの召団の存続やその形態（誰がどのように継承していくのか）は少なくとも講筵や文字において見る限り、関心の外だつたと言わざるを得ない。もしも、「召団」が、「教会」でも「無教会」でもない、第三の新しい「信仰共同体」として、将来にわたつて存続・発展・継承されていくべきものであるならば、当然にそれにふさわしい「継承」の在り方（少なくとも、ビジョ



ンにおいて）が示されるべきではなかったか。したがって、この問いかけは、再び、「召団」とは何か、その独自の存在理由はいずこにありや、という最初に提起した問題に結びつくことになる。

以上、長々と私（奥田）の問題関心——召団のメンバーにとつては関心の薄い、面白くない（ないしは、信仰の本質とは別の低次元のどうでもよい）問題かもしれない——を述べたが、どうか、召団の各員、とりわけ「長（代表）」及び長年、召団の形成・維持・発展に尽力してこられた兄弟姉妹の方々が、自覚的にこの問題（課題）と取り組み、召団の使命と今後の課題について認識を新たにし、かつ深めていただければ幸いです。

《参考文献》

『エン・クリスト』

2号（11～15頁）、

3号（2頁）「新宗教改革」、

11号（2頁）「日本キリスト召団」、

12号（3頁）「新宗教改革の歌」（9～15頁）、

特に大切なのは

24号（1985年10月）「武蔵野幕屋（東京キリスト召団）創立45周年記念祭 午前集会 日本キリスト召団の歴史的使命 小池辰雄」（8～11頁）である。

25号（2頁）「新宗教改革」（ソネット第二）、「新宗教改革」（講演）（8～12頁）、

26号（2～3頁）「新宗教改革」（ソネット第二、第三）、

28号（2頁）「新宗教改革」（ソネット第四）、（3～5頁）「基督全十二召団の歌」、

29号（2頁）「新宗教改革」（新春に祈る）

『無の神学』（小池辰雄著作集 第3巻）の「第一部 無の神学原論」の

「第5章 キリスト者とは何か——キリストの無者」、

「第7章 オーヘル・エクレシア論——幕屋・召団（教会）論」、

「第13章 新宗教改革」の「（二）新宗教改革——終末論的展望」

その他、小池先生の信仰告白の骨子は、『キリスト告白録』の随所に表れている。セミナーに参加される方は、これらの文献のうち、近づきやすいものを選んで、少しでも自ら考えるように努めていただければ幸いです。



ご案内

2013年7月 夏季福音特別集会（京都）のご案内

2013年7月14日（京都）

昨年の充実した夏季福音特別集会から1年が経とうとしています。今年は、6月1日（土）・2日（日）、御殿場YMCA東山荘において、「キリスト召団の使命と課題」のテーマのもと、内容豊かな「福音特別セミナー」を開催することができました。参加出来なかった方々にも、事前の配布資料（宿題）や当日配布の「講筵骨子」等を通して、熱気に満ちたセミナーの靈氣に触れていただけたことと存じます。

今年の夏季福音特別集会においては、更に一步を進め、集会員一人ひとりが、独立独歩の福音の使徒として、またキリストの証し人として、堅く立つことができるように、聖書の神髄を体得し、これを日々の生活の中で実践していくための土台を構築したく願います。

聖書は「神のことば」と言われていますが、一口に聖書と言っても、旧約聖書と新約聖書とは、その性格はかなり異なります。私たちは、新約聖書には習熟することができて、旧約聖書については量的にも、内容的にも、これを読みこなすことは容易ではありません。イスラエル民族の民族史という面の強く出ている内容のところは、私たちに関わりはないのではないかとさえ思われます。それでは、どこを、どのように、吸収すればよいのか、どのような視点から取り組めばよいのか、悩ましいところです。この難問を解く鍵として、私は、主イエスの言葉

「この聖書（旧約聖書）は我につきて証しするものなり。然るに汝ら生命を得んために我に來るを欲せず。」（ヨハネ5・39、40）

を挙げたいと思います。つまり、新約の光で旧約を観る。別の言い方をすれば、旧約の事蹟や神に従った人たち（アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、ヨシヤ等）の足跡、預言者の預言内容（イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、アモス、ミカ、ホセアなど）が新約聖書（福音書や使徒書簡）においてどのように受け止められているか、新約聖書のなかにどのように流れ込んでいるか、を知れば、それを手掛かりに旧約聖書の大切なところ（私たちにとっての靈的食物・養分）を吸収し、私たちの信仰の揺るがぬ土台を体得することができるものと考えます。

このような観点からの実践（実験）として、今回の特別集会において、新約聖書の「ヘブル書」（ヘブライ人への手紙）に取り組みたいと思います。この書においては、旧約からの引用が、随所に、沢山出てきます。特別集会に参加される方は、ぜひ、引用の旧約の箇所（詩篇、出エジプト記、エレミヤ書、創世記）を探し出し、それに当たってみてください。ぜひ、主体的に取り組んでください。私の希望としては、「全参加」が原則であることをご理解いただきたく、よろしくお願いいたします。夏季特別集会が実り豊かなものとなりますよう、参加者お一人お一人の祈りと準備によるご協力を心より待望いたします。



2013年8月 夏季福音特別集会 ヘブル書

2013年8月23～24日(京都)

● Ⅰ 理解のための手引き(引用聖句を中心に。カッコ内が出典)

1・5 「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」(詩2・7)

「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」(サムエル下7・14)

1・6 「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」(詩97・7のギリシャ語訳)

1・7 「神は、その天使たちを風とし、……」(詩104・4のギリシャ語訳)

1・8～9 「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、……」(詩45・6～7)

1・10～12 「主よ、あなたは初めに大地の基を……」(詩102・25～27)

1・13 「わたしがあなたの敵を……」(詩110・1)

2・6～8 「あなたが心に留められる人間とは、……」(詩8・4～6のギリシャ

語訳)

2・12 「わたしは、あなたの名を……」(詩22・23)

2・13 「わたしは神に信頼します」「ここに、わたしと、神がわたしに与えて

下さった子らがいます」(イザヤ8・17～18)

3・7～11 「今日、あなたが神の声を聞くなら、……」(詩95・8～11)

荒れ野における民の不満と反抗については民数記11章、14章、20章、21章を参照。

5・6 「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」(詩110・4)

6・14 「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす」(創

22・16～18)

8・5 「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」(出エジプト

25・40)

8・8～12 『見よ、わたしがイスラエルの家、またユダの家と、新しい契約

を結ぶ時が来る』と、主は言われる。……」(エレミヤ31・31～34)

9章 「地上の聖所と天の聖所」 幕屋の描写は、シナイの荒れ野で造られた幕屋の記述に基づく。出エジプト記25～26章参照。「燭台」については同25・31～39、37・17～24。「机」については同25・23～28、37・10～15、「供えのパン」については同25・30、参照。「マナ」については同16章。「マナの入った壺」のことは同16・33～36、「芽を出したアロンの杖」については民数記17・16～26を参照。

9・19～21 「モーセの降り注いだ契約の血」(出エジプト24・3～8)



- 10・5～7 「あなたは、いけにえや献げ物を望まず、……」（詩40・7～9）
 10・30 「復讐はわたしのすること、……」（申命記32・35～36）
 10・37～38 「もう少しすると、来るべき方が……」（ハバクク2・3～4）

11章 本章は、旧約時代の人々の信仰を称賛し、その模範を歴史的に、时期的に三代にわたって述べる説教のようなもの（フランシスコ会聖書の注解）

（1）太祖時代、ノアの洪水以前と、それに続く時代における太祖たちの信仰の模範について（1～22節。ヨセフまで）

（2）モーセ時代、モーセとその後継者ヨシヤ（23～31節）

（3）その後のイスラエルの大人物の時代、即ち士師時代からマカバイ時代に至る期間の人物の信仰の模範（32～38節）

アベル 創4・4～11、マタイ23・35

エノク 創5・18～24

ノア 創6・8～9・24、特に6・13～22、7・1、マタイ24・37～39、第一

ペテロ3・20、第二ペテロ2・5

アブラハムとその生涯 創12～25章、同12・1～4（旅立ち）、22・1～19（イサクを献げる。

ヤコブ書2・21、ローマ書4・17）

イサク ヤコブとエサウに対する祝福 創27・27～29、同27・39～40

ヤコブ 子どもたちを祝福し、神を礼拝する 創48・15～16

ヨセフ 臨終のとき…… 創50・24～25 出エジプト13・19

モーセ 出エジプト1・15～ 男児殺害の命令

同2・1～ モーセの生い立ち、結婚

同3・1～ モーセの召命

11・26 「キリストのゆえに受けるあざけり」にいう「キリスト（メシヤ）」は「神の民イスラエル」を指す（詩89・51～52）。

11・27～28 「過越の食事と血」 出エジプト12・21～30

11・29 「紅海を渡る」 出エジプト14・15～31

11・30 「エリコの城壁」 ヨシヤ記6・2～21

11・31 「娼婦ラハブ」 ヨシヤ記2章全体。引用箇所は2・8～14

11・32 「ギデオン」 士師6・11～8・31

「バラク」 同4・6～5・31

「サムソン」 同13～16章

「エフタ」 同11・1～12・7

「ダビデ」 サムエル記上16・1～列王記上2・10、



「サムエル」 同1・1～25・1
 11・33 「ライオンの口をふさぎ」 ダニエル書6・22～23
 11・34 「燃え盛る火を消し」 同3・22～25
 奥田の感想…ダニエル書は感動的な物語。ぜひ、この際、1章～6章を通読していただきたい。

11・35 「女たちは死んだ身内を…」 列王記上17・17～24 (エリヤによる奇跡)、
 列王記下4・25～37 (エリシャによる奇跡。4・8はシュネムの女の物語)
 11・36 「鎖につながれ、投獄される」 エレミヤ20・2、37・15～16、38・6、
 列王記上22・24～28 (預言者ミカヤの受難)

11・37 「石で打ち殺され」 歴代誌下24・20～21 (祭司ヨヤダの子ゼカルヤの受難)
 「のこぎりで引かれ」 ユダヤ教の伝説ではイザヤの受難の様

「剣で切り殺され」 列王記上19・10 (エリヤ以外の主の預言者)、エレミヤ

26・23 (預言者ウリヤの死)

「羊の皮や山羊の皮を着て放浪し」 列王記下1・8 (エリヤ)

「さまよい歩きました」 列王記上19・3～8 (エリヤ)

11・38 「岩穴(洞穴)、地の割れ目」 列王記上18・4、列王記上18・13 (アハブの宮廷長オバドヤが預言者を洞穴にかくまい、養う)、列王記上19・9 (イゼベルに命を狙われ、荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けたエリヤは、1本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。」横になつて眠ったエリヤを天使が助ける。パン菓子と水を与え、励ます。その食べ物に力づけられた彼は、40日40夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた。エリヤはそこにあった洞穴に入り、夜を過ごした。見よ、そのとき、主の言葉があつた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。」)

奥田の感想…列王記上19・1～9のこのくだりは、胸に迫るものがある。あの偉大な預言者エリヤにして、この苦しみ！顧みたもう神のもとでの、それも神への信を貫いたがゆえの迫害の中で、これほどまでもエリヤは苦しまなければならなかったとは！主イエスの苦難の御生涯を先取りしているようにも思える。信仰を貫くとは、こういうことだということ、我々は十分に認識し、覚悟すべきだ、と思う。

12・5～6 「わが子よ、……」 (箴言3・11～12)

12・15 「苦い根」 (申命記29・17b)

12・16～17 エサウのこと (創27・30～40)

12・18～21 シナイ山での出来事 (出エジプト19・16～18、20・18～21、申命記4・10～12、5・23～26)

12・26 「わたしはもう一度、地だけではなく天をも……」 (ハガイ2・6、2・21)



- 12・29 「わたしたちの神は、焼き尽くす火」 （申命記4・24）
13・6 「主はわたしの助け手。……」 （詩118・6）

● II ヘブル書の要点

「旧約」の世界（靈的次元）に対する「新約」の世界（靈的次元）の素晴らしさ（優位性）を様々な視点（角度）から論証し、クリスチャン（キリスト信者）は絶対的にキリストに帰依し、全托し、キリスト一筋に貫き、キリストを賜った神の愛の御旨（御心）に応えるべきである、と奨める。まず、1章の冒頭において、神は御子キリストによって世界を創造されたこと、御子は神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであり、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられることを宣言する。つまり、神にとって、宇宙にとって、我々人間にとって、御子キリストが中心であり、究極なるお方にして全き救い主であることを高らかに謳いあげる。

以下においては、「旧約」と「新約」の対比がいくつかの主題においてなされるが、根底にあるのは、上に述べた点だということを常に想起してほしい。

1、御子は天使（御使い）にまさる（1章）

当時、旧約の律法の仲介者は御使いたちと考えられていたが、新しい契約の仲介者は、御使いよりもはるかにすぐれたキリストであることを、ヘブル書（の著者）は証明する。そのため、キリストと御使いを3点において比較する。

- ① イエスは御子であり、御使いたちは彼を礼拝する者である（1・5～6）。
② 御使いは神の僕にすぎないが、御子は神であり、支配者であり、造り主であり、永遠なるものである（1・7～12）。
③ 御使いは奉仕するために派遣されたものであるが、御子は勝者であり王である（1・13～14）。

2、イエスはモーセにまさる（3・1～6）

この点に関しては、第二コリント3・6～18をぜひ、読むように。

3、救い主であり、偉大な大祭司であるイエス（2・5～18、4・14～5・10、6・20～8・6）

2・9では、

「イエスが、死の苦しみゆえに、『栄光と栄誉の冠を授けられた』のをみています。神の恵みによって、すべての人のために死んでくださったのです」と述べ、



「多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者（イエス）を数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方（イエス）に、ふさわしいことであつた」（2・10）

という。そして、2・14～18では、イエスは私たちと同じように肉の体（血肉）を備え、同じような苦しみを味わつて下さったこと、

「ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができるのです。」

との慰めに満ちた言葉が語られている。なお、5・7～10。ピリピ書2・6～11。讃美歌312。

4、「旧約」の祭儀、贖罪の儀式と「新約」におけるイエスによる永遠の完全な贖罪（救い）
神の僕としてモーセは神のお告げ通りに礼拝の規定と幕屋（第一の幕屋：聖所と第二の幕屋：至聖所）を設け、祭司たちによる礼拝、供え物と犠牲の献げものを供する儀式が行われ、特に年に一度だけは大祭司が第二の幕屋（至聖所）に入つて贖罪の儀式が執行された。9章～10章に詳しく述べられている。大切なことは、しかし、これらの厳粛な祭儀・儀式によつても人間の本性（罪）の浄化には全く役立たず、無力であること、

これらは、後に来たるべきイエスによる全き永遠の贖い（贖罪）の前表（ひな形）にすぎないこと。

「律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。」（10・1）

を示す。キリストは

「世の終わりにただ一度、御自身をいけにえとして献げて罪を取り去るために、現れてくださいました。」（9・26）

「第二のものを立てるために、最初のものを廃止されるのです。この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」（10・9～10）

「キリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、その後は、敵どもが御自分の足台となつてしまうまで、待ち続けておられるのです。なぜなら、キリストは唯一の献げ物によつて、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさつたからです。」（10・12～14）

以上のヘブル書の叙述と同内容を述べているのが、コロサイ書2・6～23です。

5、「旧約」の律法の世界と「新約」の御霊の世界

モーセが「旧約」の世界の代表者であるとすれば、キリストは「旧約」の世界に生まれ、「旧



約」の軛を背負いながら、新しい「新約」の世界を切り開かれました。このことをヘブル書は、「この祭司（イエス）は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられた」（7・16）
と言い、

「その結果、一方では、以前の掟（モーセの律法）が、その弱く無益なために廃止されました。——律法が何一つ完全なものにできなかったからです——しかし、他方では、もつと優れた希望（イエスのこと。イエスによる新しい契約）がもたらされました。わたしたちは、この希望によって神に近づくのです。」
（7・18～19）

と宣言する。この新しい契約については、8・6～13において、エレミヤ書31・31～34を引用する。

「来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」（同31・33）

と。つまり、「旧約」においては外的なものにとどまっていた「神の律法」が「新約」においては内面化され、心において、霊において、神・キリストとの真の結合が成就するのである。これこそ、ローマ書の大切な主題の一つであり、「律法の義」から「信仰の義」への転換、「罪と死の法」から「命の御霊の法」への、恵みによる大転換なのである。ヘブル書では残念ながら、まだ、「聖霊の世界」（ローマ書、ガラテヤ書、エペソ書、コロサイ書）が展開されていないが、「旧約」から「新約」への転換の過渡期ともみられ、「旧約」から「新約」への橋渡しを宣言する書としての役割を十分に果たしている、と観るべきであろう。

6、信仰とは。信仰の貫き、必要な忍耐、神の賜う試練

10章19節から本書の終わりまでは、苦難と試練に見舞われながら、なお確固たる信仰を貫き、勝利するようにとの、熱いメッセージが語られている。印象的な箇所をあげるならば、

「³⁵されば大なる報いを受くべき汝らの確信を投げすつな。³⁶神の御意を行いて約束のものを受けたために必要なるは忍耐なり。³⁷『いま暫くせば、来るべき者きたらん、遅からじ。³⁸我に属ける義人は、信仰によりて活くべし。もし退かば、わが心これを喜ばじ』³⁹然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。」（10・35～39文語訳）

「¹³この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでしたが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、……¹⁶……彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。……神は、彼らのために都を準備されていたからです。」（11・13～16）



「イエス・キリストは昨日も今日も永遠までも変わり給うことなし。」（11・8文語訳）

「¹²それで、イエスもまた、御自分の血で民を聖なる者とするために、門の外で苦難に遭われたのです。¹³だから、わたしたちは、イエスが受けられた辱めを担い、宿営の外に出て、そのみもとに赴^{おもむ}こうではありませんか。¹⁴わたしたちはこの地上に永続する都を持つておらず、来るべき都を探し求めているのです。¹⁵だから、イエスを通して賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえる唇の実を、絶えず神に献げましょう。¹⁶善い行いと施しとを忘れないでください。このようないけにえこそ、神はお喜びになるのです。」（13・12～16）

以上の奨めと共通するのは、ピリピ書3・20～21

「²⁰我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の処より来り給うを待つ。²¹彼は万物を己に服^{したが}わせ得る能力によりて、我らの卑しき状^{さま}の体を化えて、己が栄光の体^{からだ}に象らせ給わん。」（ピリピ3・20～21）

コロサイ書3・1～4

「¹汝ら……上にあるものを求めよ、……²上にあるものを念^{おも}い、地にあるものを念うな。³汝らは死にたる者にして、其の生命^{いのち}はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」（コロサイ3・1～4）

また、霊的戦いについては、エペソ書6・10～20を参照のこと。試練における忍耐については、ヤコブ書1・1～18、ペテロ第一書4・12～14。

